

オスカー・グラーフ ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ
編著 『日本の妖怪』

シュトゥットガルト、1925年（3） 翻訳

安 松 みゆき

日本の狐の化け物は、中国の原形ほど恐ろしいものではない。いくつかの例では、狐は人間から恩恵を受けたことに感謝して、人間世界のあらゆる美德を得、しかも女性の姿で受け入れられている。

安部保名 Abe no Yasuna は公卿だが、ある朝寺に迷い込んだ1匹の子狐を、別の2人の公卿が自分のすぐ後ろで追い掛け回すのを見た。その2人は保名に対して、病を直すのに狐の肝臓が必要なため狐を渡すように求めたが、保名は子狐を彼の着物のなかに隠してそれを拒んだ。そして安部保名の父親と激しいやりとりとなり、最後にはその父親が討たれてしまった。

保名の父親が埋葬されてから数日後、保名は悲しみにくれながら寺の庭を散歩していると、1人の美しい娘が彼の前に現れた。この娘は、かれの苦しみに深く同情してその原因を尋ね、そしてかれを優しく慰めた。保名はこの見ず知らずの女性に激しく恋い焦がれてしまった。次に寺の中庭で彼女に再会したとき、保名は彼女の手をとって彼女に結婚を申し込み、すぐさま妻として彼女を家に連れ帰った。その後3年間2人は幸せに暮らした。結婚1年目には男子をもうけたが、その頃からこの若い妻は、ある日、無断で居なくなるという奇妙な行動をとっていた。その時には障子にただかなり短い詩を書き残した。

恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉
(葛の葉は、葛の木の葉のこと)

夢の中で、「葛の葉」、すなわち、居なくなった若い妻が保名に、自分がかれに助けてもらった狐で、その感謝の気持ちから父親を失った保名を慰めるために人間の姿をしていたことを打ち明けた。

この2人の子供である晴明 Seimei は学問の才にたけており、後に有名な陰陽師になった。鳥羽上皇 Kaiser Toba はかれを朝廷付きの陰陽師に任命し、重要な事柄についてはいつも彼に助言を求めた。

あるとき上皇が病気になる、どの医者もこの病を治すことができず、上皇の愛する側室であった美しい玉藻前 Tamamo no Maye の優しい介護ですら、その苦しみを和らげることはできなかった。上皇の容態は日増しに悪化していった。

母親から超人的な透視力を受け継いでいた晴明は、上皇の寵愛者の玉藻前に、ある薄暗い晩に出会った時、緑の輝きが彼女の頭を覆うように輝いていたことに気付いた。それで彼女がゆっくりと上皇の命を奪ってゆく狐の幽霊であることを見抜いた。

晴明の忠告で御所の庭先には建ちの高い祭壇が設えられた。そこには上皇の病氣平癒祈願が記されていた。御所の全員が儀式を執り行うために1ヶ所に集まったが、ただ1人、美しい玉藻前だけが自分の居室に居た。晴明は朝廷の役人に命じて彼女を強引に外に連れ出した。彼女は逆らうこともなくゆっくりと祭壇に近づいてきた。音楽が鳴り響き、そして晴明が呪文を唱えながら神聖なる捧げものの象徴である御幣 Gohei を持ち上げた。すると恐ろしい雷が鳴り響き、9本の尾を持った金色に輝く狐が空を切って逃げていった。玉藻前も消え去ったのである。

何人かの強者たちはすばやく馬に乗り、その化け物を遠くの広野まで追いかけた。そこでかれらはその化け物を捉えて殺した。するとその体は消えて、その代りに彼らが眼にしたのは、化け物の居たところに狐の姿があり、そこに黒い石が残っていたことである。

それ以来誰もその広野に近づく者はいなかった。というのは石を見つかったり、それに近づいたりすると、その者は命を奪われるからである。

随分と時が過ぎ、敬虔深い僧侶がその広野にやってきた。大胆不敵にもその僧侶は自分の杖で狐の石を叩いて粉々に砕いた。石のたたりがついに解かれたのであった。

3人の芸術家はほとんど同じ対象を様々な方法で扱ってきた。前述した国芳による1枚では、女狐の葛の葉が後ろ髪をひかれつつもゆっくりと歩みを進め、子供と夫と別れなければならない。狐の化け物には人間の姿に戻るまでの時間が残されていなかった(図32)。

しげむね Shigemune は国芳 Kuniyoshi とほぼ同時代の人物だが、史実に忠実に狐退治の儀式全体を描いた。この構成には特に文化史的な価値がある(図35)。興味深いのは、かねのぶ Kanenobu が同じ主題を逆の立場から解釈していることである。優しくなびくような動きを見せながら狐の化け物が陰陽師に近づくものの、その陰陽師からは目を反らしている。しかし早くも彼女は化け物の光に包まれて、次の瞬間に落雷が低くどよめき、化けの皮をはがされた妖怪は、空を切って逃げ去った(図38)。

北斎も何度もこの狐の話を描いている。それは、昔、百歳になった猿の孫悟空が、崑崙山脈で数名の道教の呪術師から学んだ魔術を使って美しい化け物に近づくという話である。孫悟空は己の毛を抜き、それを吹き飛ばして魔術で百匹の猿を呼び出した(図33)。

身を守る呪文の書かれた戦斧で英雄に攻撃された狐は、あっさりと逃げ帰った(図34)。

不撓不屈に自然を前にして学ぶ巨匠北斎のような描き方を習熟し得たものは、北斎以後に1人もいない。北斎は、実物をたゆまず観察することに夢中になりすぎて、様式的な線を忘れてしまったものの、かれの描いた人体から得られる現実的な生命観には、きわめて大胆な動きが表現されているので、北斎は常に前世代にも、また逆に新しい世代の立場にも立つことになる。

芳年の描いた2匹の狐(図37, 39)は、むしろ個性的で独自の表現を見せるものとして考えられる。葦の草の中に居る1匹の狐は、一瞬をうかがっている。満月が空高く昇る

と、その狐は自らの呼吸を生命の水に変えることができる。放浪する僧侶でありながら無邪気な存在として描かれたもう1匹の狐は、しばしば放浪者を過ちに導くために辺りの気配をうかがっている。

完全に悪霊の権力を持ち合わせ、彫り物で表されたのが、能で使われる狐の面である。この野獣のような目をした魔物的で忌まわしい面は妲己の話に一致するものである。

この面を製作した芸術家は、15世紀後半に活躍した三光 Sanko である（図140）。

通常、狐の妖怪は、何らかの悪の力を具現する。人間の運命に干渉しようとして、かれらには、神の全権という見通しの利かない雲の覆いの裏に隠された、破壊的な手段となる高度な力が、与えられている。それに対して、他の悪霊たちは、大地の暗やみの深遠から出てきただけの獣の妖怪であり、特別な目的もなく、獣のような悪なるものを具現している。これに数えられるのが猫の妖怪である。それは、しばしば次の時代の木版画の巨匠がとりあげているが、特に国芳によって描かれている。

仏陀が亡くなると、地上の生きとし生けるものがこぞってその死を悲しんだが、ただ猫だけは例外であった。それゆえ猫よりも残忍な動物はいない。

古い寺のまわりには、しばしば大きな猫があちらこちらさまよっている。

ひとりの娘が遅れてこちらにやって来ると、年をとった小柄な老婆が現れて、娘を無理矢理近くの小屋に連れ込んだ。そこでその老女はぞっとするような鬼婆に変身し、その娘を大きな肉切り刀で正確に斬り殺して貪り食うために、すぐに娘を縄で縛りつけた（図40）

岡部 Okabe という場所には、小さな古寺が建ち、その隣には今日でもまだ猫の姿をした黒っぽい石が、風化しつつも置かれているのが認められる。昔そこにはみすばらしい家が2、3軒建っていた。そのうちの1軒には年をとった化け猫が住んでいた。昼間はその化け猫は老女に姿を変えていた。その化け猫がついに死んで、石に変わったのである。

「しかし、そのことについて正確に知るものは誰もいない」（図40, 42）

さらに同様の2作品において国芳は、芸術的な自我を放棄した出来の良さを部分的に示している。それらの場面は、芸術家のたくらみによっても、純粋なモリタート（大道芸人が手回しオルガンの伴奏などで語り歌う恐ろしい絵物語）に似たものではないだろう。

ここでも若い娘が猫の手中に落ちてしまっている。猫は人食い鬼婆 Onibaba に姿を変えて、不幸なその娘を十字に磔、すぐにぞっとするようなことを始めようとしている。このような緊迫した場面にキリストのような観音が現れて、その犠牲者を救済する（図67）。

次の作品では残虐なものであふれている。ここでは1人の僧侶によって破局することが隠されている。その僧侶は、異常なほど敬虔な少年として描かれているが、その後ろには神がいて、その神と少年が神秘的に結びついている。神はその少年に非凡な力を貸す。僧侶である少年は巡礼に出かけて、まさに悪業の場にちょうど出くわせ、そして鬼婆を抹殺した（図68）。

時として猫もまた、美しい女性に姿を変えて男性を誘惑し、じわじわとその血を吸う。よりアレゴリー的に、国芳は、この化け物を美しく釣り合いのとれた構成で、繊細に和らげられた色彩と共鳴させている。美しい娘の後ろに見える死体は、おそらく仏教（インド）

のモヒニ Mohini の発想に由来する「欺瞞」を意味するのであろう。その死体の面影と姿は、正面からは愛らしいが、しかし背後から見ると灰である（図41）。

同様の主題を国芳（図123）が、すでに述べたシリーズのなかの1枚の肉筆画で扱っているし、また狂斎も図66を描いている。

ほとんど尽きることがないほど、悪霊的な原生動物と人間の中間のような生き物、といった新たな像を生み出す伝説があり、また最も危険な中においても優れた方法で物事を解決する英雄や、場合によってはそのような話に強い関心を深めさせる歴史的な人物が、数限りなく存在する。

英雄頼光 raiko あるいは Yorimitsu は、ある晩、かれの4人の忠実な家来、すなわち四天王を呼び、鬼を退治するように命じた。当時、京の都を不安にしていたのが鬼たちであり、しかもその鬼たちは御所を襲い、途方もない悪業を行っていた。家来が盤上の遊びで時間を潰している間、頼光は1人でじっと座っていた。

日が暮れて強い嵐が家を襲った。そこで頼光は悪霊の行列を眼にした。悪霊は密集した群衆の中に入り込んだため、何も聞こえなくなり、何も見えなくなった。いまこそ、化け物に立ち向かって抹消する時であることを頼光は悟った（図12）。

御所では、鬼の羅生門が一晩中なりひと天皇 Kaiser Narihito に執拗につきまとった。恐ろしい叫び声をあげ、鬼は屋根の上に昇ってがたがたと音をたてたが、夜警の誰ひとりとしてその鬼を追い払う勇気を持ち合わせていなかった。頼光はかれの忠実な家来である渡辺綱 Watanabe no Tsuna に御所の護衛を命じ、己の最良の刀を持たせた。

渡辺綱は準備万端で怪物を待った。夜は見通しがきかず、また雨や嵐によって音がかき消された。突然、丸い灯が2つ、煌々と屋根の上で燃えた。綱は刀に手を置いた。すると巨大な前脚が上から降りてきて、かれの兜をつかんだ。刀が低い音をあげた。そして鬼の腕が綱の足の前に落ちた。吠え盛る声を上げつつ、化け物は消えていった。

長くて先の鋭い爪ともじゃもじゃの毛のはえた腕を、綱は翌朝、頼光に手渡した。頼光は、かれにそれを大切に守るように命じた。というのは、7日経つと鬼は再び本体に合体することができるからであった。

綱は、その勝利品なるものを注意深く棚に閉まい、一日中刀を抜いてそれを見守った。1週間がほぼ終わろうとしていたとき、綱の年をとった叔母が綱に会いに来た。この良き叔母は、綱が長い間家を出ようとしなかったので病気だと思っていたからであった。

綱は叔母に繰り返し鬼との話を聞かせた。すると叔母はかれに、一度その化け物の腕を見せてくれるように頼んできた。綱がそれを拒むと、彼女はあまりにも悲しんだので、綱はとうとう棚を開けて腕を見せた。

「それは、わたしのものだ」という甲高い叫び声とともに、老女は腕をひっそらい、うなり声をあげて、恐ろしい鬼婆の姿に変わり、雲の中に消え去った。綱は鬼婆に矢を放ったが、無駄であった（図69,70）。鬼婆はすでに遠くに消えていった。

深く後悔しながら、綱は次の朝、頼光に昨日に起こったことを報告した。

今、頼光は決心し、かれの4人の忠実な家来に、完全な化け物の根絶にとりかからせる

ことにした。というのは、不幸なことが日々増大し、連日鬼の酒呑童子が、娘、子供、老人たちを捕まえては、遠い山の中にある岩の隠れ家に連れて行き、そこで貪り食っていたからであった。

僧服の下に武装した山伏（仏教の山岳僧侶）の姿で、頼光と4人の家来は、山の森の中に入っていった。

しかしかれらはこのように広い森に覆われた山の中から、あの魔の洞穴を見つけることができようか。長時間無駄にさまよったのち、高い岩壁の斜面に1人の娘を見つけた。彼女ははじめにやつれはてて、泣きながら人骨や人肉の破片を埋めるために、まさに墓穴を掘っていたところであった。そこに埋められるのは、鬼が食した残片である。娘はかれらに地下の洞窟への入り口を示した。かれらは天井の高い地下の円天井と、その隣に人をむさぼり喰ってぐじゃぐじゃに散らかった穴を見つけた。かれらのまわりには地下の魔物が群がっていた。白く光る女の姿が頼光のまわりを漂っていた。柔らかくて暖かい紐のようなものが手足を締め付けるのを頼光は感じると、かれは刀を抜き、あらゆる方向から切りつけて、その紐を切り落した。そしてそこで眼にしたのは、燃えるような目つきをした恐ろしい化け物、すなわち巨大な土蜘蛛であった。土蜘蛛は鋸のような鋭い棘を持った腕で暴れ始めた。

頼光はその土蜘蛛の頭を切り落とした。頼光の仲間は一ピク一ピク動く胴体を粉々に切り裂いた。すると土蜘蛛の腹からは、9千人分の頭蓋骨が出てきたのであった（図14, 15）。

洞穴の一番奥からは、鈍い音楽が鳴り響いてきた。一行は注意深く音のするほうへ近づき、明るく照らされ、豪華に飾り付けられた円天井の部屋にたどり着いた。地面が高くなった場所は半分布で隠されているが、そこに鬼の酒呑童子が座っていた。天皇の御所の儀式を真似てそのまわりには別の鬼を従えていた。湯気の立つ人間の肉が次々と廻ってくる。豪華に着飾った娘たちが怪物たちの間に座って、様々な楽器を奏でている。化粧をしていたにもかかわらず、娘たちのやつれた顔立ちと悲しげな目が目に留まった。娘の中で最も美しい娘は、酒呑童子の横に座って、優しくその肌をさすらなければならなかった（図17）。

大歓声の中で5人の英雄が迎えられた。というのは、鬼たちはかれらを、たやすく手に入れた食肉と見なしたからであった。頼光 Yorimitsu は贈物に、強い眠り薬が混ぜられた酒樽を差し出した。まもなくすると化け物たちは眠くなって千鳥足になり、そのときに5人の英雄がかれらの頭を切り落としたのであった。

酒呑童子 Shutendoji の恐ろしいほどの巨大な首は床から飛び跳ねて、頼光に飛びかかり、かれの兜にかみついて頭から切り裂こうとした。3度上に押され、また英雄を下に抑えつけた。しかしついに砂の上に転がって息絶えた（図13）。

鬼の切り取られた首を積み込んで、英雄たちは救い出した娘たちを連れて京都に戻った。それ以来鬼については何も耳にすることがなくなった。

より控えめに振る舞うのが、たぬき Tanuki（あなぐま）である。たぬきが神秘的な魔力を持っていても、たぬきの場合には大抵人間にいたずらをするために限られている。

たぬきが坊主 Bozu（托鉢僧 Bettelmoench）に化けて信心深く巡礼するのは、俗っぽい音を立てながら突然茂みの中に消え去るためである。兵士達の鼻面を持ってたぬきは引き回すと、まもなくたぬきは隠れ場所から太鼓の音を出したのである。たぬきは、そのとき自分の腹を叩いているのであり、前脚を器用に使って音をだしているのである。たぬきは夜毎人間をだまして間違った道や田圃に誘導する。しかしたぬきは恩返しすることを忘れない。

ある貧しいながらも大変敬虔で善良な僧侶が、寺の近くの小さな家に住んでいた。寒さの厳しいある冬の晩に、かれは閉めた鎧戸から、かすかにその戸を叩く音を耳にした。すると、半分凍えたたぬきが外に立っていた。気の毒に思った僧侶は、たぬきを家の中に入れて、残り物の魚を与え、寝床の場を与えた。翌朝、この客人は何度も御礼を言って帰っていったが、夕方になると、また戻ってくるようになった。2人は良き友人となり、春が来ると、たぬきは別れを告げて山にもどっていた。

次の冬になると、たぬきが再び現れた。そしてその後何年ももどってきた。一度、たぬきは僧侶に、何か望むことはないのか、と尋ね、もし望みがあるのならそれをかなえるために協力することを話した。僧侶は悲しげな笑みを浮かべながら、次のように語った。

「わたしには、ただひとつの望みがある。それはわたしがいつか、多くの信者が眠る寺の横に埋葬されたいということだ。ひとりでそれをするのには、そして葬式には3枚の金貨が必要だ。人生の楽しみを享受するには、いろいろなかたちがある。しかし最後にどのように埋葬されるのかはそうしたことと同じである。1番美しい墓碑文が善行なのである。」

たぬきはこの言葉を心から理解しつつも、それ以上何も言わなかった。春が来たとき、たぬきは秋までの別れを告げた。冬が来て僧侶は戸をかすかに叩く音を待ち望んでいたが、無駄であった。どれだけ僧侶は風の音で外に出たことか。1度も彼の級友は現れなかった。

そうして3年の冬が過ぎた。僧侶はすっかり年をとり、弱々しくなっていた。旧友を僧侶は心苦しく感じていた。きっとかれはどこかでなにかの原因で命を落としたのだと考えていたからである。

冬が来た。ある寒い静かな夜にかすかに戸を叩く音がした。老人は戸のところに急いだ。たぬきが外に立っていた。しかし、何と貧相なことか。たぬきの美しい毛は、みすぼらしくぼさぼさになり、前脚には切り傷があり、そして肋骨のすべてが皮膚から見えるほどであった。けれどもうれしい再会であった。年をとった善良な僧侶はたぬきの持ち物を家の中に運び込んだ。そして2人がシュンシュンと音をたてるやかんのそばに座ったとき、たぬきは小さな袋を取り出して、それを僧侶に渡した。たぬきは、僧侶に、たくさんの恩恵の感謝の印として受け取ってくれるように頼み、次のように付け加えた。「私は深く悲しみました。というのは、私があなたさまに一度も感謝を表すことができなかつたからです。寺の敷地内に墓地を持ちたいというあなたさまの願い事を知って、私は決心しました。佐渡の金山で働くことにしたのです。そこに私は居ました。しかし、私の肌は弱くなってしまいました。3枚の金貨を手に入れるには3年が必要でした。どうぞ、喜んでそ

れを受け取って下さい。」だが、僧侶は、そのように苦勞して手に入れたものを受け取ることを拒んだ。たぬきは、しかし泣きながら、僧侶に懇願した。僧侶はその金を受け取って次のように言った。「わしはおまえからの贈物を受け取るが、わしと一緒に明日寺に来て欲しい。そしてわしはその金を正しく使うことを、確認してほしい。」

僧院長は、2人の訪問客をたいへん驚いて出迎えた。そして忠実で感謝を忘れなかったたぬきを称えた。僧侶は聖なる場所に墓所を購入した。そしてその後もかれの忠実なたぬきと長生きをした。

ひょうきなたぬきのいたずらは、同様に館林の茂林寺の1人の年をとった和尚によって語り伝えられている。この和尚は古い茶釜を持っていた。その茶釜は、使われないときには、部屋の片隅に置かれていた。ある日、和尚は、この茶釜を火の上にかけてやりたい、まさにそうしはじめたところ、茶釜の胴体から4本の足が出てきた。蓋と注ぎ口が、毛の生えた頭に変わり、長くて毛深い尻尾が現れ、まもなく茶釜はたぬきに化けた。たぬきは逃げ出して、何度も寺や和尚のまわりをぐるぐるまわっていたが、和尚はたぬきを上手く捕まえて、箱の中に閉じ込めた。たぬきはその中で再び茶釜に姿を隠したのであった。

和尚は、そのような無気味なもので何もしたくなかったので、それを鋳掛け屋に売り払ってしまった。鋳掛け屋は物音で夜に目が覚めると、茶釜のたぬきが部屋を歩き回っていた。ある友人の助言を受けて鋳掛け屋はその珍しい茶釜を金もうけのために長い間見せ物にした。そして何の心配もなく生活できるだけの大金を稼いだ。それで鋳掛け屋はその茶釜をまた寺に連れ帰った。寺ではその茶釜を大切に寺の宝物用の箱に入れている。

この話のヴァリエーションでは、たぬきは和尚のいない間に和尚の姿をして、そして敬虔な訪問客を驚かした。その間にたぬきはかれらに突然本当の姿を見せたからである（図58）。

それほど際立った種族ではないが、龍と同じようにほとんど古い種族の起源を持つのが、天狗である。天狗はインドのガルダ Garuda というヴィシュヌ Vishnu の伴侶に由来する。ガルダは騎乗の動物として神に仕えた。元来天狗は大きなオウムのような姿をしていた。仏教の影響の下で天狗は一般に半身像になり、中国の美術では羽根を持ち、鷲鼻の人間として表された。しばしば足は動物の足で描かれている。そのようなものは、ここではティエン・コウ Thien-kou といわれる天の犬と呼ばれた。

日本ではガルダ天狗の展開がまさに楽しい進歩を見せ、特に鼻が何の意味もなく残された。天狗には2つのタイプがあり、ひとつは一般的な天狗であり、人間の姿をして羽根と立派に伸びた長い鼻を持ち、「木の葉天狗 Konoha Tengu」と呼ばれている。もうひとつのタイプは「烏天狗 Karasu Tengu」である。

天狗は、大天狗 Dai Tengu という君主を持っていた。大天狗は、長い白髪と、腰紐の位置までくるほどの長い口ひげを伸ばし、その地位の印として7枚の羽根から出来た団扇を持っていた。天狗は仏教と確かに関係するが、聖人でも悪霊でもない。大天狗は1度仏陀の命令を破ったため、天国にも地獄にも居ることができなくなったのである。

森や寂しげな山がかれの居場所である。普通はおとなしくしており、ただあちらこちらで天狗はちょっとした悪ふざけをする。例えば、突然山や藪の中から現れたり、あるいは道を壊してぼんやりと灯る光を灯している（図52）。だが悪い魔物たちは天狗から遠ざかり、それとは逆に天狗たちが戦いの対象となり、魔物たちのあらゆる秘密を知るのである。

語られているのは、有名な英雄が超自然的な巧みな戦法を天狗から教わり、天狗に感謝するという話である。

源義経 Minamoto Yoshitsune は、権勢を誇った平家 Taira を滅ぼしたが、かれは大天狗の弟子であった。義経の父である義朝 Yoshitomo は、恣意的で残虐な支配をすすめた摂政者の平清盛 Taira Kiyomori に対して反乱を起こした。平清盛は自分の2才になる孫の安德 Antoku を天皇の地位に就かせるために、自らの考えで天皇を失脚させたのである。義朝は、自分に反抗する平家一族を完全に滅亡させた。すると今度はひとりの背信者が気丈な義朝を殺し、褒美を貰いたいためにその首を清盛に差し出した。

義朝の妻、常盤御前 Tokiwa Gozen は、厳冬の中で放火されて燃え盛る家から3人の幼い息子連れ出して逃げた。義経はそのときまだ2歳だった。そして長い間彷徨ったあげく、隠れ家を見つけた。やっと彼女は子供たちが安全であると思ったとき、次のような話を耳にした。常盤御前の母親が暴君に常盤御前や子供たちの居場所を言わなかったため、暴君がその年をとった母親を捕まえて殺そうとしていたという話である。

常盤御前は、3人の息子たちが殺されないように逃げなければならなかったが、自分の母親をも助けなければならず、必死に京都に戻った。その頃、彼女の味方は全く逆の立場になり、彼女たちを排除するように命じられていた。

常盤御前は、その時代には日本中で最も美しい女性と言われていた。彼女はおそらく、そのことが唯一の武器であることを知っていたのだろう。彼女は子供たちとともに清盛に平伏して、勝利を得たのである。

清盛は常盤御前の母親を解放した。常盤御前はその代りに、かれの側室にならなければならなかった。そのことで彼女の子供たちも救われた。最初常盤御前は3人の息子たちを自分の手元で養育していたが、その後暴君には若い義経の鷹のような目があまりにも大胆に思えるようになった。

母親の常盤御前はさらに先を読んで、7歳になった義経を鞍馬山の僧院に連れて行った。その僧院の住職である東光方 Tokugyo はかつて義朝を教育したことがあった。今その息子を喜んで受け入れたのである。最大の注意を払って彼の教育が行われた。そしてまもなく義経は同僚の中で才覚を表わすことになった。

月日が流れて義経は、まもなく16歳になろうとしていた。義経は僧坊に1人で居た時に、そこに祖先の活躍が記録された巻物を置いた。かれの祖先とは、あの勇ましい頼光であった。かれと同じように義経は殺された父親の仇を打つことばかりを考えていた。しかし誰が義経に戦法や騎馬、弓の撃ち方を教えるというのか。

ある晩、かれは僧院からこっそり忍び出て、刀を持って深い原生林を通過して、人間が近

寄らないような悪名高い谷ではあるが大昔に忘れられた神の聖域であった僧正が谷 Sojo-ga-tani に行った。そこで天狗たちが大天狗の下で集会を行っていた。

そこに義経は足早に急いで行き、不気味な巨木の下にある祠の前に跪いて、神が常に側に居るように、そして義経に戦術を教える師を与え、その師によって義経の願いを聞き入れてくれるようにと祈った。

義経のまわりが動き出し、羽根を持った不気味な姿をした者が、森の暗やみのいたるところから浮かび上がった。天狗が来たのだ（図46）。

義経は逃げようとはしなかった。静かに義経は祈ることにした。すると現れた時と同じくらいの速さで天狗たちは消えてしまった。すぐに義経は刀を構えて戦術を学ぶために敵を前にしているように、樹木の前に立って左右に飛び跳ねて一撃を与えた。低く不気味な笑いが彼の背後からどよめいた。そして巨大な体が祠の後ろに現れた。長い鼻を持ち、ぎらぎらした目、白い髪と髭、天狗の支配者が義経の前に立った。天狗は義経に戦闘技術の極意を伝授した。そして義経は日本で最も強い男の弁慶 Benkei に打ち勝ったのである。

この弁慶 Benkei は捨て子として僧院で育った。住職とは確かに親類関係にあったらしい。まだ身体が小さい時から、弁慶はとてつもない体力を持っていた。弁慶の仲間は、弁慶に逆らうと、弁慶はその仲間の6、7人をまとめて屋根の上に置き去りにしたり、降参するまで中高く持ち上げ続けた。年を経て、かれの激しい気性や厳かな愛情が武器となった。

数限りない悪戯を弁慶は友人に行った。ついにかれは僧院に居ることができなくなり、別れを告げて、ある時期から京都の近くを放浪するようになった。弁慶の願望とは、鎮圧された源氏の中から勇敢な主人を見出して、その人物とともに全力で恐ろしい清盛を失脚させることであった。

僧院では多くの新たなものが、僧院から僧院へともたらされた。そして弁慶も若い源義経の輝かしい個性を耳にした。かれの熱い思いとは、その若武者に一度会って、彼の重臣となることを許してもらうことであった。

きわめて有名な刀鍛冶師むねのぶ Munenobu に人間を超越した大きさの刀に注文したが、その刀鍛冶師は、刀の先端に1番固い鋼を用いて実際に使える刀を鍛造することはできるが、それには千本の刀が必要だ、と話した。

夜の悪業で弁慶は華奢な侍たちを襲い、かれらから鉄製の刀を奪い取った。毎回臆することなく弁慶はこの生業を営んだため、住職の法衣を着た恐ろしい天狗の仕業とする不気味なうわさが連日伝えられた。多くの者は天狗を実際見たがったが、誰もそれを確かに知っている者はいなかった。そしてむしりとられた者たちは沈黙を通していた。

明るい月の光が京都の5条橋に落ち、その柱の影に息を潜めた巨大な体が立っていた。遠くからかすかに柔らかな笛の音色が聞こえてきて、段々とその音が近づいてきた。笛を吹く者は、豪華な金欄を身に付けた痩せた青年であり、ゆっくりと橋を渡りはじめた。その若者の高価な刀は輝いていた。弁慶は暗やみから出てきて、その若者に道を譲り、次のように叫んだ。「おれは天狗だ。刀をよこせ。」しかし青年は、突然消えて矢の如く人間の

背の高さほどのある橋の欄干の上に飛び上がり、甲高く笑いながら、そこからその大男にかれの扇子で一撃を喰らわせた。大男は長刀でかれを突いたが、青年は地面から飛び跳ねて弁慶を後ろからまた軽く一撃を喰らわせた。弁慶が振り返ると、若者は別の側の欄干の上に居た。いかに弁慶が向きを変えても、武器は空を切った。弁慶がそのすばやい姿を橋の先端に見つけても、弁慶はもうすでに後ろに取り残され、若者を追っても、そこには弁慶だけが立っていた。いや、1人ではなく、無気味な羽根を持った生き物が、弁慶に飛びかかって攻撃している（図47）。

まさにそこに天狗が現れたのであった。弁慶は目に見えない怒りと戦っていた。つまり、その若い魔物、あるいは何者かは天狗に支えられて、大男が負けを認めなければならないほどの機敏さで攻め立てた。しかし天狗が義経の名前を名乗るのを耳にすると、弁慶はこの義経の前に深く平伏して、重臣として生涯を捧げることを願い出た。義経はこの時生涯最も忠実で良き強者を得ることになった。この強者は、最後の苦しい戦いの日々の中で敵から義経を救い、自らの命を義経のためにゆだねたのであった。

（続く）



図12 歌川国芳
《源頼光公館土蜘蛛妖怪図》



図13 葛飾北斎
《大江山鬼賊酒頼童子を退治す
源の頼光朝臣『絵本和漢譽』》

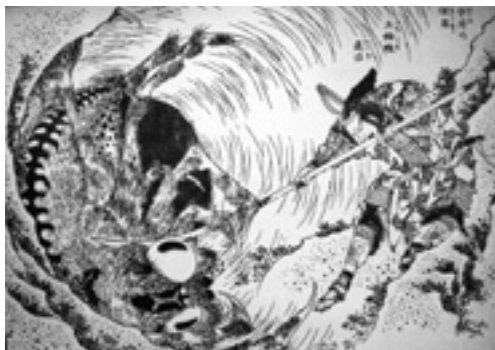


図14 葛飾北斎
《平井の保昌土蜘蛛退治『和漢絵本魅』》



図15 大蘇芳年
《源頼光土蜘蛛を切る図
『新形三十六怪撰』》



図17 河鍋暁斎 《鬼と美女》



図32 歌川国芳
《妻籠『木曾街道六十九次之内』》



図33 葛飾北斎
《孫悟空と殷の王妃『北斎漫画十篇』》



図34 葛飾北斎
《佛智見によって金毛九尾の悪狐を除く
中天竺普明長者『絵本和漢譽』》



図35 しげむね
《九尾の雌狐、玉藻前御所より退治》



図37 大蘇芳年
《むさしのの月『月百姿』》



図38* 揚州周延
《東絵図夜競》



図39 大蘇芳年
《吼喊『月百姿』》



図40 歌川国芳
《岡部宿猫石由来之図『東海道五十三対』》



図41 歌川国芳
《昔ばなしの戯、猫又年をへて
古寺に怪をなす図》



図42 歌川国芳
《日本駄右衛門猫石之古事》部分



図46 大蘇芳年
《義経と天狗『一魁漫画』》部分



図47 歌川国芳《弁慶と天狗》



図52 鳥山石燕
《松明丸『画図百器徒然袋、卷之中』》



図58 大蘇芳年
《茂林寺の文福茶釜『新形三十六怪撰』》



図67 歌川国芳《安達原一ヶ家之図》



図68 歌川国芳
《風流人形の内、一ヶ家の図、祐天上人》



図版69大蘇芳年
《老婆鬼腕を持去ふ図(『新形三十六怪撰』)》

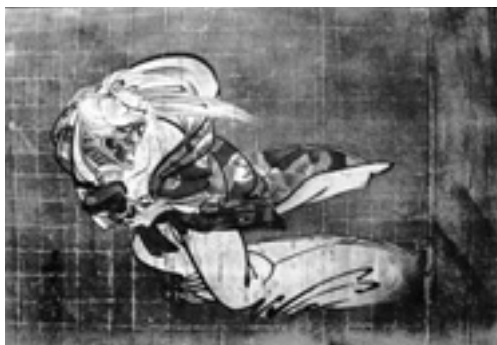


図70 柴田是眞《茨木》



図123 歌川国芳
《安達原一ヶ家之図》



図140 三光
《狐の霊、15世紀の能面》